表紙から

大会を紹介するコーナーに集まる児童たち（札苗小）

サポーターは小学校

優勝を祝う折り鶴も作りました（本町小）。折り鶴は横浜市に送られ、全国から集められた26,000羽と一緒に決勝戦の会場を飾ります

サッカーの大会が開幕

2002FIFAワールドカップ™がいよいよ始まりました。参加三十二カ国のうち六カ国が札幌ドームを会場に熱戦を繰り広げます。そこで札幌で試合をするチームを応援しようと、市内の小学校八校が応援校として名乗りを上げました。東区では二校が応援校です。

ビバ！ アルゼンチン

本町小学校（遠藤孝雄校長　五百五十一人）はアルゼンチンを応援しています。アルゼンチンは地球の反対側に位置する国であり、あまりなじみがありません。そこで今回の大会を機に興味を持ってもらおうと応援を決めたそうです。学校では休み時間に児童が集まる教室にアルゼンチンを紹介するコーナーを設置。その教室で児童たちは、選手に応援の言葉を届けようと、応援用の白地の旗に寄せ書きをしました。「優勝を目指せ」「私たちは仲間だ、アミーゴ（スペイン語で「友だち」という意味）」といった言葉とイラストが、にぎやかに旗を埋め尽くしました。

組織力を誇るドイツを応援

ドイツは組織的なサッカーをするチームだといわれています。そのドイツを応援しているのが札苗小学校（川島敏義校長　五百四十二人）。ドイツは輝かしい戦績を誇るチームなので、応援にも一層力が入ります。五年生は社会科の授業でインターネットを利用してドイツについて調べました。また、ドイツ・バイエルン州にあるプロのサッカーチームのコーチを全校集会に招いて、国の様子、子どもたちの暮らしやサッカーについて、お話をたくさん聞きました。

どちらの学校の担当の先生も「今回の大会をきっかけに、児童一人ひとりが世界の国々に目を向け、興味と理解を深めてほしい」と期待を込めて話してくれました。

ひがしすとーりー

第15回

馬車鉄道で行こう ～札幌軌道（二）

冬は馬そりが運行する

札幌軌道による物資や乗客の輸送は順調に進みました。馬鉄の営業は、沿線農業地帯の生産高に依存していましたが、おおむね良好だったそうです。一九一三（大正二）年九月の営業成績は、乗客人員八千九百四十八人、その運賃合計千四百十七円四十銭、運搬貨物は九百トン、その運賃千百六十円五十六銭を記録しています。

積雪期には、馬鉄に代わって「客ソリ」といわれる馬そりが運行しました。しかし、道路事情が悪い上に、除雪もされなかったため、運行中に何度も転覆したそうです。一九一七（大正六）年、馬鉄は茨戸側へ〇・六キロ延長されました。

北7条東1丁目付近。左に積んでいる俵はエンバク（大正初めころ）

ガソリンカーが走る

一九二二（大正十一）年、札幌軌道は馬に代えてガソリンカーを二両導入しました。馬力はアップしたものの、少しスピードを上げるとよく脱線したそうです。そんな場合は乗客が車両を持ち上げて軌道へ戻し、また走り続けました。

バス営業へ転換する

一九三四（昭和九）年十一月に国鉄札沼線（桑園―石狩当別間）が開業します。馬鉄と札沼線が篠路村烈々布で平面交差し、競合する路線になりました。札幌軌道は、鉄道省から損失補償を受け、一九三五（昭和十）年三月に軌道廃止の許可を得て、バス営業へ転換します。軌道廃止時の保有車両は重量七トンのガソリンカー五両、客車七両、貨車三十三両でした。

同年四月、札幌軌道は社名を札幌軌道バス株式会社に改めます。同社は後にさらに社名を札幌観江バス株式会社に改め、茨戸水郷の宣伝に努めました。第二次世界大戦中、この会社をはじめ道央のバス会社二十一社が統合し、北海道中央乗合自動車株式会社になりました。統合してできた会社が現在の北海道中央バス株式会社の前身です。